

貿易赤字拡大の背景にあるもの

発表日：2013年12月20日（金）

～構造的に輸入が増えやすくなっている～

第一生命経済研究所 経済調査部
担当 エコノミスト 星野 卓也
TEL:03-5221-4526

（要旨）

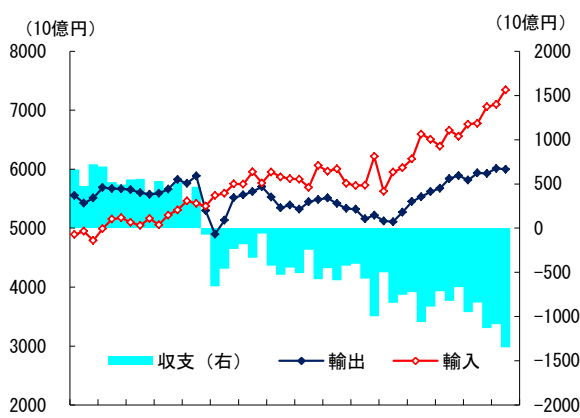
- 貿易赤字が拡大している。輸出が加速感を欠いていることも一因だが、このところ趨勢的に輸入増加が続いていることが、貿易赤字の拡大を生んでいる。
- 日本は2011年の震災後、貿易赤字に転じた。当時は原発停止に伴うエネルギー輸入の増加が貿易赤字の拡大の主因だった。足元でも円安に伴うエネルギー高は赤字拡大の一因となっているが、それ以上に機械関連の輸入が増えていることが足もとの貿易赤字を拡大させている。
- 日本の輸入浸透度は、趨勢的に上昇している。これは、内需の好調が輸入の増加に繋がりにやすくなっていることを意味する。こうした輸入浸透度の高まりに、安倍政権後の内需好調が重なることで、輸入の増勢が強まっている。
- 経済の発展に伴って製品競争力が低下、貿易赤字が拡大する、という現在の状況は、「国際収支の発展段階説」と整合的な動きといえる。
- 目先は消費増税前の駆け込み需要によって内需が強含むため、貿易赤字は大幅な赤字が続く可能性が高い。その後は海外経済の加速などを受け貿易赤字は縮小へ向かう見込みだが、貿易黒字化の見込みは立たない。貿易赤字の解消は困難な道のりになってきている。

○拡大する貿易赤字。輸入の堅調さが背景に

貿易赤字が拡大している。9～11月の貿易収支（季節調整値）は、1兆円を超える赤字を計上、11月の赤字幅は既往最大となった。こうした中、9・10月の経常収支（季節調整値）は、初の2ヶ月連続赤字を記録した。こうした動きの背景には、輸出の伸びが緩やかなものに留まっていることがある。無論、これは赤字拡大の一因だが、輸入の増勢の強まりが貿易赤字の拡大に繋がっていることも見逃すべきではないだろう。

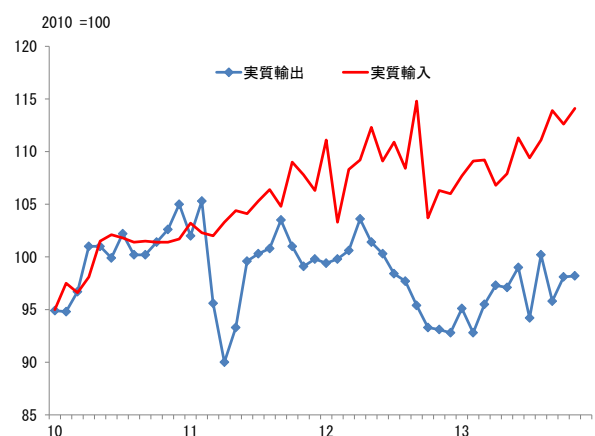
2011年の貿易赤字転落時には、原発停止に伴う燃料輸入の増加が貿易赤字拡大の主因であった。しかし足もとの輸入をみると、状況は変わってきているようだ。本稿では昨今の輸入の動向を整理したうえで、日本の輸入構造の変化について述べる。

資料1. 名目輸出入と貿易収支（季節調整値）



（出所）財務省「貿易統計」

資料2. 実質輸出入（季節調整値）

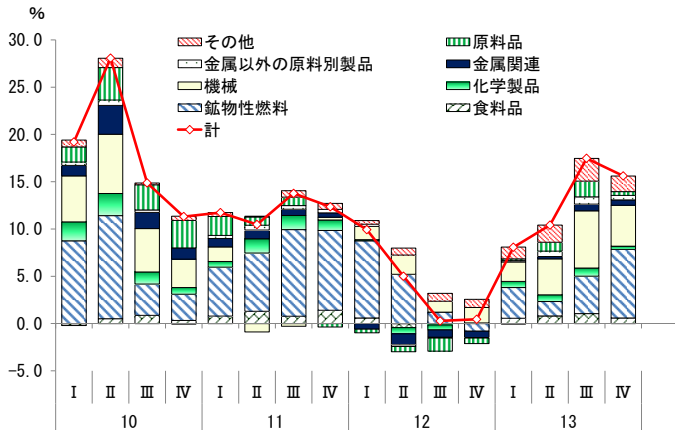


（出所）日本銀行「実質輸出入」

○機械製品の輸入が増えている

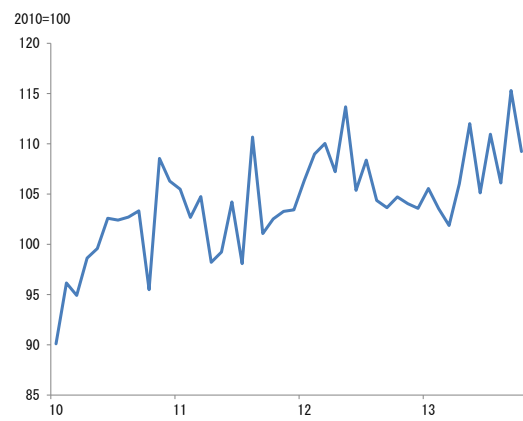
輸入を財別にみてみよう（資料3）。2011年度から2012年度前半にかけての輸入増加は、殆どが鉱物性燃料輸入の増加で説明できる。原発停止に伴う火力発電の増加などを背景に、燃料輸入が数量・価格の両面で増加したことが主因だ。ところが、足もとの輸入をみると様相は異なる。円安に伴う燃料価格の上昇を背景に鉱物性燃料は引き続きプラス寄与しているのだが、機械製品の輸入増加が、輸入を大きく押し上げていることがわかる。これは円安による価格の押し上げによるところも大きいですが、数量面でも機械製品の輸入は増加傾向にあり、足もとの機械輸入増加は為替だけで説明できるものではない（資料4）。以下では、機械製品の輸入について整理する。

資料3. 輸入額の推移（前年比）



（出所）財務省「貿易統計」
（注）直近は2013年10・11月平均。

資料4. 機械製品の輸入（数量、季節調整値）

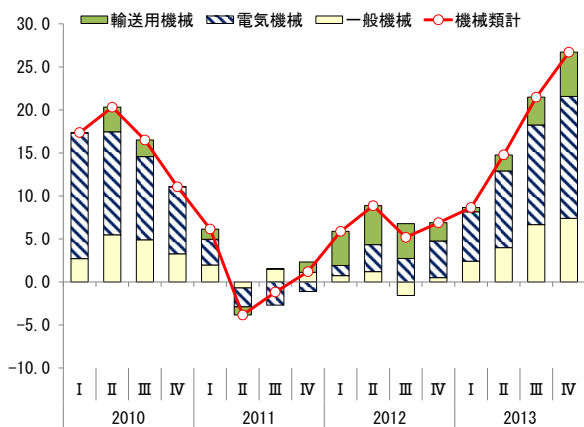


（出所）財務省「貿易統計」
（注）輸送・電気・一般機械の数量指数を2010年の輸入額で加重平均したもの。季節調整は当社。

（1）電気機械

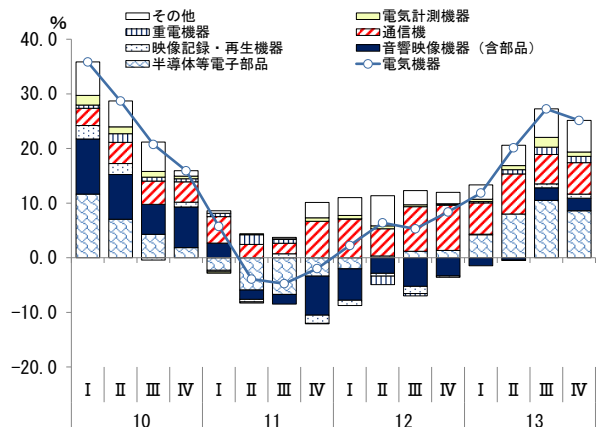
機械輸入を細かくみていくと、電気機械の増加寄与が大きい（資料5）。増加が目立つのが半導体等電子部品の輸入だ（資料6）。国内の電子デバイス関連製品の生産が拡大していることや、メモリ市況の改善による価格上昇が背景にあると考えられる。そして、このところ一本調子で拡大しているのが、通信機の輸入だ。近年のスマートフォンの普及を背景に、中国からの通信機輸入が趨勢的に増加しており、貿易赤字拡大要因になっている。

資料5. 機械輸入額の推移（前年比）



（出所）財務省「貿易統計」
（注）直近は10・11月の平均。

資料6. 電気機械の輸入額（前年比）



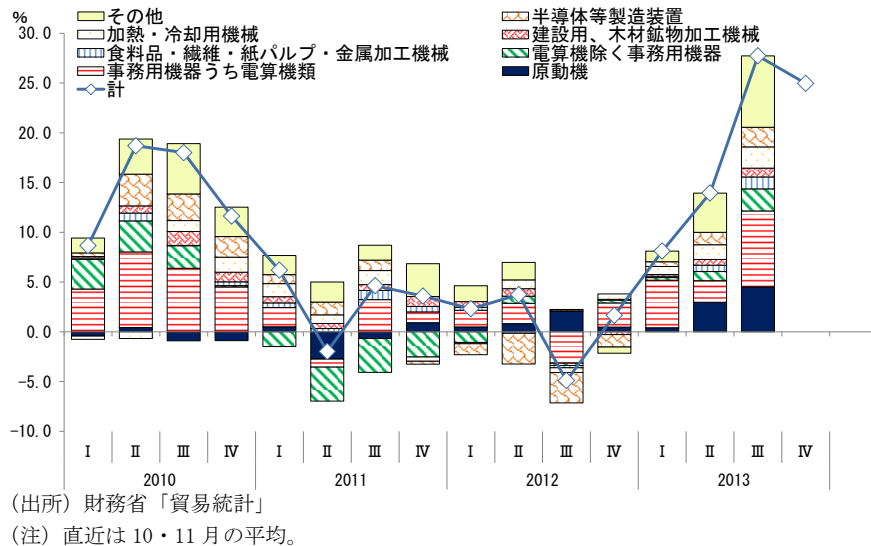
（出所）財務省「貿易統計」
（注）直近は10・11月の平均。

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

(2) 一般機械

一般機械の輸入額も増加傾向にある。主因は電算機類（パソコンなど）を含む事務用機器の輸入増加だ（資料7）。こうした品目はそもそも日本企業の海外生産比率が高く、需要拡大が輸入増加につながりやすい。近年のタブレットPCの普及も、輸入増加の一因になっていると考えられる。

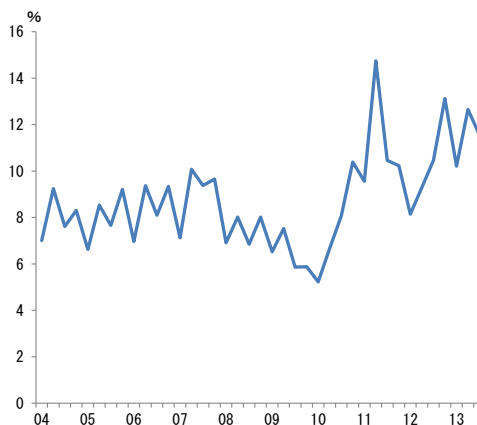
資料7. 一般機械の輸入額（前年比）



(3) 輸送用機械

輸送用機械の輸入が拡大していることも目を引く。国内の自動車販売をみると、①海外メーカー車の売れ筋が伸びていること、②工場を海外移転し逆輸入を行うメーカーが現れたことが背景にあるとみられ、輸入車の国内販売に占めるシェアが上昇している（資料8）。これが、足もとの輸送用機械の輸入増加に繋がっていると考えられる。

資料8. 国内の乗用車販売（普通＋小型）に占める輸入車のシェア



(出所) 日本自動車販売協会連合会 (注) 国内メーカーの海外生産車を含む。

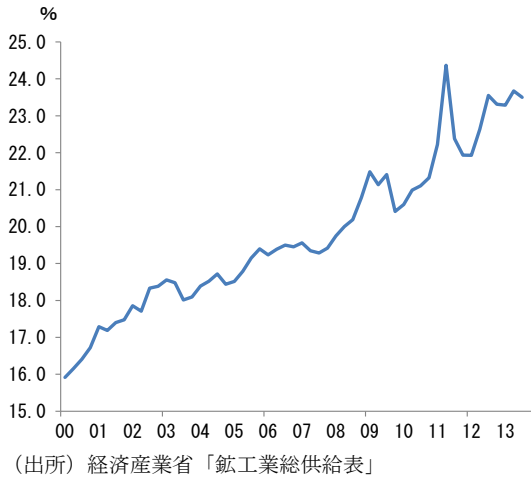
○変わる日本の輸入構造

日本の輸入浸透度（鉱工業総供給に占める輸入品の割合）は、趨勢的に上昇している（資料9）。これは、国内需要の拡大が輸入に繋がりがやすくなっていることを意味し、貿易赤字の拡大要因である。足もとではこ

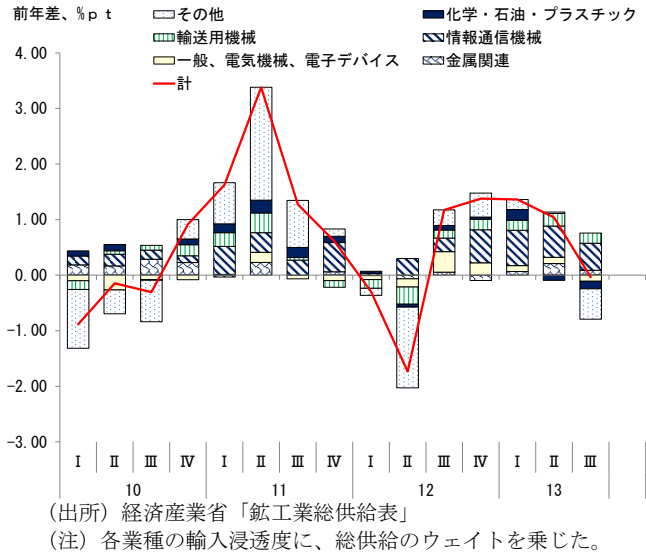
本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

こうした輸入浸透度の高まりの中、安倍政権誕生後の内需好調が重なることで、輸入の増加が急ピッチで進んでいると解釈できる。なお、業種ごとに輸入浸透度の動向をみると、近年では先述した通信機などの輸入拡大を受けて、特に情報通信機械の輸入浸透度の高まりが著しく、製造業全体の輸入浸透度の上昇に繋がっている（資料10）。

資料9. 輸入浸透度（鉱工業計）

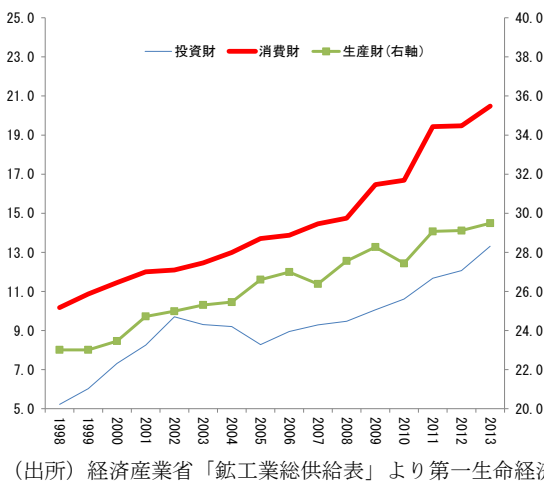


資料10. 輸入浸透度（前年差・業種別寄与度）

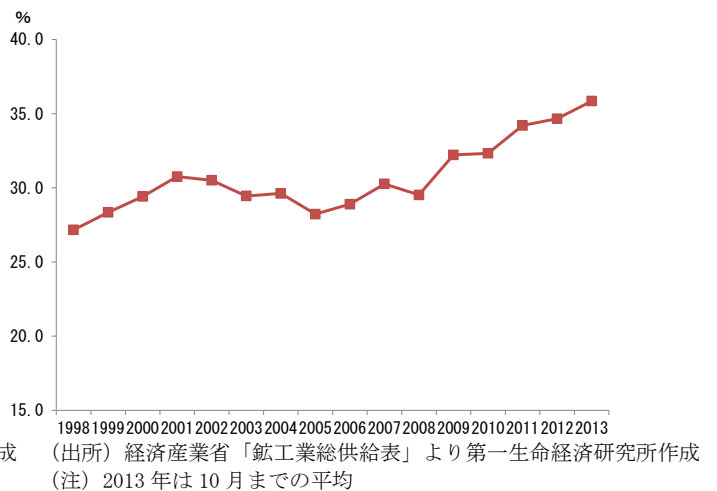


財の種類別に輸入浸透度をみると、資本財・消費財・生産財の全てで輸入浸透度が上昇しており、中でも消費財の上昇ペースが速まっている（資料11）。先述したように、スマートフォンやタブレットPCなどのIT関連財において、海外製品のシェアが高まっていることが大きいと考えられる。輸入の財別シェアをみると、消費財を中心に最終需要財の割合が緩やかに高まっていることも、こうした動きを反映している（資料12）。日本は旧来より、「原材料（生産財）を輸入して、加工品（消費財・資本財）を輸出する貿易構造」と言われてきたが、足元では最終需要財の輸入比率が上昇しており、そうした構造に少しずつ変化が生じていることがみえてくる。

資料11. 財別・輸入浸透度（輸入/総供給）



資料12. 輸入に占める最終需要財（消費財+投資財）の割合



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

また、こうした輸入構造の変化は、経済学における「国際収支の発展段階説」と整合的との見方が可能である（資料13）。仮説に従えば、先進国は経済の発展に伴い、人件費の上昇などによって製品競争力が低下する。これによって海外製品が流入（海外向け輸出が減少）することで、貿易黒字が縮小（赤字が拡大）する。先にみたように、日本ではIT財などにおける輸入浸透度の高まりが、貿易赤字の拡大に繋がっている。こうした動きは国際収支発展段階説と整合的な面があり、日本の製造業の競争力低下を示唆するものである。

資料13. 国際収支の発展段階説

	貿易・サービス収支	所得収支	経常収支
①未成熟債務国	-	-	--
②成熟債務国	+	--	-
③債務返済国	++	-	+
④未成熟債権国	+	+	++
⑤成熟債権国	-	++	+
⑥債権取崩国	--	+	-

（出所）第一生命経済研究所作成

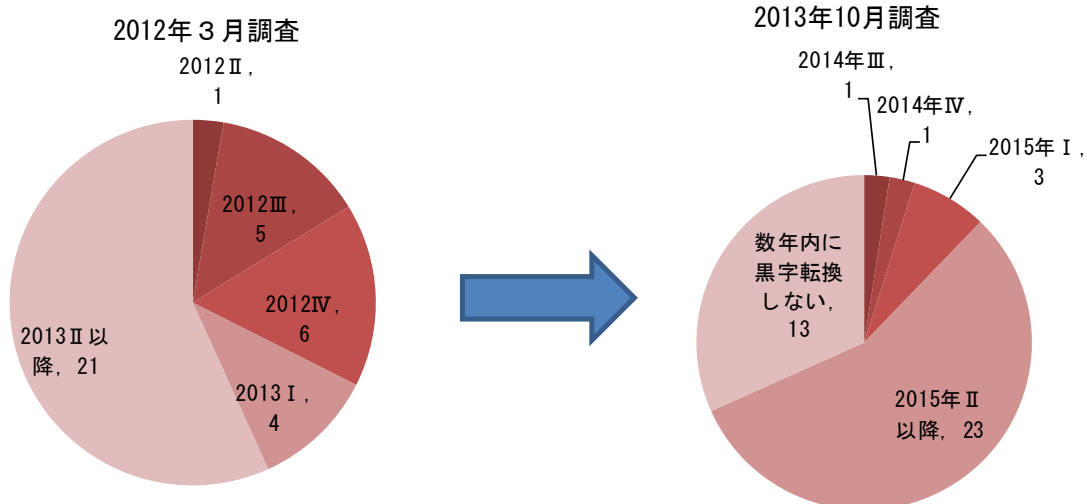
（注）+は黒字拡大（赤字縮小）、-は黒字縮小（赤字拡大）を示す。

○貿易赤字の解消は困難になっている

このように、IT関連製品を中心に国内における海外製品の競争力が向上（国内製品の競争力が低下）する中、日本は以前に比べて輸入の増えやすい経済構造に変化してきている。

2011年の貿易赤字転落時には、“赤字は一過性であり、いずれ貿易収支は黒字に戻る”との見方がエコノミストの間でも有力であった（資料14）。ところが、こうした輸入の趨勢的な拡大圧力を背景に、貿易収支の黒字化は見込みづらい状況になってきている。特に目先については、消費税率引き上げを前にした駆け込み需要によって内需が強含むことから、輸入にはより一層増加圧力がかかりやすい。その後に関しては、海外経済の緩やかな加速、消費税率引き上げに伴う内需の鈍化によって赤字幅は幾分縮小へ向かうと予測しているが、貿易収支の黒字化までは難しそうだ。構造的な赤字拡大圧力がかかる中において、貿易赤字の解消は困難な道のみになっている。

資料14. 貿易収支黒字化の時期（民間エコノミスト予測）



（出所）日本経済研究センター「ESPフォーキャスト調査」

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。